

Vol.13 風評払しょくと地域再発見。

Food Camp®で挑む地域課題解決の取り組み



株式会社 孫の手

代表取締役 山口 松之進 さん

実りの時期を迎えた畑を訪ね、その場で収穫したばかりの野菜をふんだんに使った料理を青空の下で味わう日帰りツアー「Food Camp®（フードキャンプ）」。福島第一原子力発電所の事故をきっかけに風評被害にさらされた郡山の農産物の信頼回復を目指し、株式会社孫の手が2016年にスタートさせました。同社の母体は、郡山でタクシー事業や観光バス事業を手がける企業グループ。事業で積み重ねた知見をツアーに活かすことで、眠っていた郡山の魅力に新たな価値を与え、持続可能な地域づくりに貢献しています。

代表取締役の山口松之進さんに、Food Camp®に取り組んだ経緯とその後の事業の広がりについて話を聞きました。

風評被害の払しょくを目的に始まった食の日帰りツアー

▶関連する SDGs のゴール…3 すべての人に健康と福祉を／15 陸の豊かさを守ろう

郡山市では、この地の風土ならではの味わいを持った野菜「郡山ブランド野菜」が複数の農業生産者により作られています。地域に新たな産品を生み出すことを目指して 2003 年に栽培がスタート。2026 年 8 月現在、「御前人参」「万吉どん（玉ねぎ）」「とうみぎ丸（とうもろこし）」など 15 品種がブランド野菜の認証を受けています。そのおいしさは口コミで広まり、今や市内外に多くのファンを持っています。

山口社長に Food Camp®のアイデアをもたらしたのは、まさに郡山ブランド野菜との出会いからでした。地元には素晴らしい食材があること、そしてそれを作る魅力的な生産者がいることを知り、大いに感動したと言います。



山口松之進さん

その後、東日本大震災と原発事故が発生。福島県の農産物は風評被害という強い逆風にさらされます。山口社長は、「農産物の安全性を伝えるためには生産者の想いを消費者に広く届ける必要がある」と考えましたが、当時は生産者と消費者が直接触れ合う機会がほとんどありませんでした。

そこで企画したのが、腕利きのシェフがキッチンカーで畑に出向き、その日その場で収穫された野菜を使った料理を参加者にふるまう、日帰りの食のツアー。参加者は畑で生産者から農業への想いを直接聞き、自ら収穫を体験。その野菜をその場でシェフが調理し、畑の一角に並べたテーブルで、生産者とともに味わいます。レストランではシェフが主役ですが、この日はシェフだけではなく、生産者も主役。生産者をヒーローにするツアーです。地域の交通や観光に関わってきた企業グループならではの発想でした。



Food Camp[®]の様子。畑のすぐ隣にテーブルがセットされている

「地元こんな素敵なものがあったんだ」と気づく機会に

▶関連する SDGs のゴール…11 [住み続けられるまちづくりを](#)

Food Camp[®]は、地元の人々にとっては地元再発見のツアーでもあります。

「よく『何もない』と言われる郡山市ですが、何もないのではなく、私達が気づいていなかっただけなんです。普段なら気にもせず通り過ぎてしまう畑に1日だけのレストランをオープンし、『こんなに素敵な場所があったんだ』『こんなに魅力的な生産者がいたんだ』と気づいてもらうことは、この地で暮らし続けたいと考える人を増やし、地域の持続可能性を維持することにつながると考えました」



すべてが順調に進んだわけではなく、畑に一般の人が入ることに対して、当初は生産者からの理解がなかなか得られなかったとも山口社長は振り返ります。

「生産者の皆さんにとって畑は聖地ですから、入ってほしくないというのが本心だったと思います。しかし、実際に畑にお客様を招き、皆さんのうれしそうな表情を見ることで、生産者の意識も変わってきました。東京からのツアー参加者も多く、風評払しょくにつながる取り組みであると実感してもらえたことも、生産者の皆さんからご理解をいただくことにつながったと思います」

また、自身が育てた農産物がシェフの手によって美しい料理へと生まれ変わり、そのおいしさに参加者が感動する様子を見ることは、生産者の皆さんが自身の仕事の価値を知る大きな機会になっているのでは、とも語ります。

高齢者も自分らしくいられる環境をつくる

[▶関連する SDGs のゴール…3 すべての人に健康と福祉を／11 住み続けられるまちづくりを](#)

Food Camp[®]にはもう一つ、山口社長が企業グループのなかで取り組んできた事業の経験が活かされています。

グループ中核企業である郡山観光交通株式会社では、2000 年から介護事業を手がけ、地域の高齢者の移動支援に携わってきました。そのなかでしばしば目にしたのが、自宅から自由に外出できず社会から孤立してしまう高齢者の姿でした。

そこで山口社長は 2009 年、タクシーによる自宅送迎付きで旅行に出かけられるツアー商品の販売をスタート。旅のすべての行程をパッケージ化することで、高齢者の方も安心して参加できるツアーを作ったのです。送迎付きだからこそ、「お酒を飲んでも安心」「たくさんのお土産を買っても自宅まで送ってくれるので安心」。その仕組みはそのまま Food Camp[®]にも活かされています。

「家族の誰かに頼ることなく、自分の好きなときに好きな旅に行けたら、老後の暮らしはより豊かなものになるはずです。当時はまだ SDGs という言葉はありませんでしたが、結果として『誰も取り残さない』ことへの貢献につながっているのかなと思っています」

水素キッチンカーの導入で環境にも配慮

[◀関連する SDGs のゴール…11 住み続けられるまちづくりを／13 気候変動に具体的な対策を／15 陸の豊かさを守ろう](#)

2019 年、株式会社孫の手は、Food Camp[®]の事業が評価され、『第 7 回環境省グッドライフアワード』の環境大臣賞を受賞しました。



環境省グッドライフアワード表彰式の様子

「生産者をヒーローにするために生まれた Food Camp[®]が環境に資する事業であることに受賞するまで気づかなかった」と山口社長は振り返りますが、受賞を機にあらためて事業を見直すなか、一つの矛盾に気づきます。キッチンカーが、排気ガスを出すディーゼル車だったのです。

「せっかく良い事業ができていても、畑を汚して帰ってくるのでは意味がありません。次にキッチンカーを買い替えるときには環境に配慮した車にしたいと考えるようになりました」

そんな矢先、トヨタ自動車から、水素燃料電池車をキッチンカーとして活用する実証実験への協力依頼が山口社長のもとに寄せられます。震災以来、福島県相双地域では復興の核として再生エネルギーに関わる取組みが数多く始まりました。浪江町にはFH2R というクリーン水素を製造する日本最大の設備が建設され、水素を活用した先進的な取り組みが進められています。Food Camp[®]がきっかけとなり、その実証実験のパートナーとして孫の手に白羽の矢が立ったのです。



水素燃料電池キッチンカーでの調理の様子

「水素を使った技術の社会実装はまだ道半ばですし、その有効性をただ講義のように人に伝えても、すぐに忘れられてしまうと思います。でも、感動できるような体験のなかに水素の技術が使われていれば、時間が経っても忘れてしまうことはないでしょう。Food Camp®に水素燃料電池キッチンカーを導入し、その車で作った最高の料理を畑で提供できれば、それを入口に理解が深まって、水素に対するポジティブなイメージが広がっていくはずです。今後は、Food Camp®を通じて水素の有効性、必要性を多くの人と共有できればと思っています」

現在はFood Camp®の枠を超え、食を通じて環境を考える機会の創出にも力を入れています。2026年7月には、猪苗代湖畔で開催された『湖まつり』に水素キッチンカーを出展。裏磐梯での繁殖により生態系への影響が懸念される特定外来種の大型ザリガニ、ウチダザリガニを食材として使用する試みにおいて水素キッチンカーを活用し、来場者にウチダザリガニを使った料理を振る舞いました。



湖まつりで振る舞われた料理

実際に見て、触れて、食べることで農業の価値を伝えてきた Food Camp[®]。その仕組みに水素という新たな要素を取り入れながら、郡山の魅力と誇りを広く届けるための孫の手の取り組みはこれからも続いていきます。「おいしい」「楽しい」から社会を変える、「おいしい革命」です。

■株式会社孫の手

受賞年度：令和3年度（第3回）

活動内容：「地元の価値創出」「生きがい創出」「郡山食文化創出」による持続可能な地域ネットワークづくり

[第3回こおりやま SDGs アワードについて](#)